

1ムガル帝国

第6代アウラングゼーブ(位1658~1707)

- └スナ派のイスラムを信仰。厳格なイスラム中心主義政策。ヒンドゥー教寺院を破壊。
- └大規模な外征→帝国最大の領土を達成 →各地で反乱・自立
- └デカン高原西部---シヴァージー(位1674~80)の( )1王国(1674~1818)
  - ヒンドゥー教徒のマラータ族の同盟。1752年にはデリー入城。信仰の自由を認める。将軍にムスリムも。
- ( )2王国(1724~1948) 首都ハイデラバード イスラム藩王による統治
- └西北部パンジャブ地方---( )3教徒の反乱(~1715)
  - 下級カースト出身の( )4(1469~1538)による。
  - ヒンドゥーとイスラムを融合させる。カーストを否定。頭に[ ]5を巻く。
- └南インド---( )6王国(1339~1947) 中心都市マイソール

[地方経済の発展]

- └デリー・( )7・ラホール→三大政治都市
- └グジャラート・ベンガル・タミル→( )8の栽培
- └デリー南方→( )9=藍=の栽培 ベンガル→砂糖の栽培加工
- └モスリン・( )10・サラサなど高級綿織物→国際商品化

⇒地域独立性を高める

イギリス=1600年英( )11会社設立=ボンベイ・マドラス・カルカッタを拠点に勢力圏拡大

- 1739年 アフシャール朝(1736~96)のナーディール=シャー(1736~47)の侵攻→デリー占領・荒廃
- 1744年 カーナティック戦争(~63)→フランスの拠点( )12陥落。イギリスの勝利。
- 1757年 ( )13の戦い=ヨーロッパ諸国の七年戦争(1756~63)に連動
  - 書記クライヴ、東インド会社の軍隊→ベンガル太守(フランス支援)の軍隊をやぶる
- 1765年 ( )14、ビハールなどの徴税権を獲得→実質的な植民地支配開始
- 1799年 マイソール戦争(1767~69, 1780~84, 1790~99)で( )15を獲得
  - マイソール軍はロケット兵器を使用して抵抗。

18世紀末( )16戦争(1775~82, 1803~05, 1817~18)
マラータ同盟=ヒンドゥー教徒マラータ族の部族連合=を破り( )17地方を獲得

19世紀 ( )18戦争(1845~46, 1848~49) シク教徒を破り( )19地方を獲得

- イギリス
  - └直轄支配地で重い地税を徴収
  - └英本国製の機械製( )20をインドへ輸出
    - └イギリスに輸出されていたインド伝統の手織綿布は衰退
  - 農民にイギリス向けの( )21や藍, 中国向けの( )22などを栽培させる

1813年 東インド会社の茶以外の貿易独占権を廃止 1833年 その商業活動も停止

- インド
  - └商品経済の浸透 重税とイギリス人の土地所有の公認
  - └イギリス人地主を含むインド商人・高利貸による地主的土地所有の急増
    - ⇒農民層の窮乏化がすすみ, 農民反乱をはじめとする社会不安が増大

2,インド大反乱とインド帝国の成立

1857年 インド人傭兵=( )23=(ヒンドゥー、ムスリム)の蜂起⇒ →インド大反乱(1857~59)❖a →鎮圧に2年  
 ⇒農民・商工業者、地主や藩王=( )24❖b、ムガル王朝の王族も含む大規模な反乱に発展  
 インド中部の藩王国ジャーンシーの王妃ラクシュミー=( )25(~1858)❖cらの活躍

- ❖a--傭兵の銃の薬包に含まれた牛、豚の脂への禁忌を発端とするが、背景にイギリス支配への根強い不満があった。
- ❖b--インドにおける間接的支配地である藩王国は大小550以上, インド総面積の約4割。
- ❖c--生年不明。夫は病没。英軍と果敢に戦うが、戦死。現在も英雄として崇敬。「インドのジャンヌ=ダルク」

1858年 イギリスはムガル皇帝を廃する⇒ムガル帝国滅亡  
 └藩王や一部の旧大領主層に土地所有権を認めて懐柔  
 └インド支配の機関であった東インド会社を解散→本国政府の( )26統治

1877年 ヴィクトリア女王がインド皇帝を兼任する( )27領インド帝国(1877~1947)

- 【イギリスのインド支配】
- ベンガル地方⇒ ザミンダリー制
  - ( )28=地主=に土地所有権を認め、地税を徴収
- マドラス・ボンベイ地方⇒ ライーヤトワリー制
  - ( )29=耕作農民=に土地所有権を認めて彼らから地税を徴収
- └19世紀末までに、港と内陸をむすぶ大規模な( )30建設❖d(1853~)によって強化
- └原料・商品の輸出入→インドからイギリスへの「富の流出」を促進
- ❖d--その長さ6万2000キロはイギリス本国をはるかに上回り、世界5位。

3,インド独立運動のはじまり

19世紀末~ 軽工業(特に綿工業)中心に民族資本家の成長 近代的教育を受けた知識人の増加  
→イギリス支配に対する不満高揚

1885年 ムンバイ=ボンベイ=綿工業の中心地=でインド国民会議=産業界の代表72人=開催  
 →ヒンドゥー教徒を中心とする( )31派形成の出発点  
 ムンバイ出身の( )32❖e(1856~1920)らの指導

- ❖e--インド中西部マハーラーシュトラ出身。インド最初期の独立運動指導者、教師、ジャーナリスト。急進派。インド人による自治=スワラジを初めて唱える。1907年ビルマ・マンダレー刑務所に投獄。

イギリス→反英運動の分裂をはかる

1905年 ( )33分割令=カーゾン法❖fを公布

- ❖f--イギリスのインド総督カーゾン(任1898~1905)が、ヒンドゥー教徒とムスリムの対立を利用し、反英運動の強いベンガル地方を両教徒の多住区(西部ヒンドゥー、東部ムスリム)を中心に分割しようとした。

1906年 国民会議派 コルカタ=カルカッタ(帝国の首都)=大会  
 └ベンガル分割令反対 └英貨排斥・国産品愛用=( )34  
 └自治獲得=( )35 └民族( )36 の4綱領を決議→抵抗運動強化  
 全インド=( )37連盟結成→イギリスの援助でベンガル分割令に賛成  
 国民会議派の抵抗運動継続→1911年ベンガル分割令撤回



インド鉄道網



インド大反乱



バーイ



ティラク

- ・綿 ・綿布 ・綿花 ・商品 ・鉄道 ・直接 ・海峡 ・教育 ・シク(2) ・バーイ ・アグラ ・デカン
- ・ビルマ ・マライ ・アヘン ・国民会議 ・イギリス ・東インド ・南インド ・マドラス ・マラータ(2)
- ・ベンガル(2) ・ティラク ・ニザーム ・キャラコ ・スワラジ ・スワデシ ・ムスリム ・マハラジャ
- ・シパーヒー ・プラッシー ・ライーヤト ・インディゴ ・パンジャーブ ・ザミンダール ・ボンティシエリ